

[テーマ]

基準 I-B 教育の効果

- (a) テーマ全体の自己点検・評価の要約を記述する。

本学全体の教育目的に基づき、3学科それぞれにおいて特色のある教育目的を「学則」に定めている。これらは学位授与の方針や教育課程編成・実施の方針にも記され、また入学者受入れの方針においても、具体的な学習成果を付加した形で示している。公表に関しては、掲示パネルや各種配付物、入学式や卒業式における告辞・式辞等で表明している。さらに、保護者や同窓生あての機関誌、入学希望者向けの入試募集要項、就職先企業向けのパンフレットなどにも記載している。社会一般に向け、本学ホームページや大学案内パンフレットにも掲載し、公表している。点検は、各学科において専任教員と非常勤講師の合同懇談会を毎年実施しており、教育目的の確認とともに見直しを図っている。

各学科では、建学の精神及び各学科の教育目的に基づく学習成果を示す「各学科の教育体系」を作成し、学生に配付している。学習成果を量的・質的データとして測定する仕組みとしては、「学習評価シート」を作成している。学生はこのシートをもとにクラス担任と面談を行い、対話を通じて学習状況を確認することができる。学習成果の表明については、3学科いずれも、最終成果物を公開発表する場を有している。これらは外部にも公開しており、機関レベルで学習成果を点検する場にもなっている。

法令順守に関しては、毎年、文部科学省の説明会や日本私立短期大学協会の各種研修会等に教職員が参加して情報収集し、学内報告を実施することで、遺漏なく対応できるよう努めている。学習成果査定の手法としては、平成23(2011)年度後期以降、既出の「学習評価シート」を介したPDCAサイクルを有している。また学生による「授業に関するアンケート」による査定は、実際に授業改善につながり、有効に機能している。

- (b) 自己点検・評価に基づく改善計画を記述する。

学生便覧等の学生に対する配付物をより見やすくなるよう工夫する。また、教育の質の保証のための学習成果の査定手法を精査・確立し、PDCAサイクルを一層進めていく。

〔区分〕

基準 I -B-1 教育目的・目標が確立している。

(a) 自己点検・評価を基に現状を記述する。

本学の教育目的は、建学の精神に基づき「学則」第1条で次のように定めている。「本学は、教育基本法及び学校教育法に則り、建学の精神を基本理念として、専門的な知識技能を修得させ、円満な人格と豊かな情操を養い、もって社会に貢献できる心身ともに健全なる人物を養成し、併せて有能な職業人としての資質を養うことを目的とする。」

また、各学科の具体的な教育目標と育成すべき人間像については「学則」第2条の2に次のとおり定めている。

「幼児教育学科は、幼児教育における高い専門性を身につけると同時に、幅広い教養と社会性を兼ね備えた保育者の育成に努め、社会の要請に応え得る人材の輩出を目的とする。」

「美術学科は、美術造形教育により芸術文化創造の一翼を担い得る能力と、健全な社会人としての能力を備えた人間の育成を目的とする。」

「ビジネス実務学科は、幅広い教養と社会性及びビジネスの実務に関する専門性を身につけ、キャリア形成に関する高い意識をもって変化する社会に対応し、地域に貢献できる人間の育成を目的とする。」

これらの教育目的は、各学科の学位授与の方針及び教育課程編成・実施の方針に具体的な教育内容として記載している。また入学者受入れの方針においても、幼児教育学科では「保育分野のスペシャリストとしての能力」が身につく、美術学科では、「無理なく段階的に基礎的な造形力」が身につく、ビジネス実務学科では「あらゆるビジネスシーンに対応できる高いビジネス実務能力」が身につくとして、具体的な学習成果を付加したかたちでわかりやすく示している。

これらの教育目的の周知を図るため、学内向けには、建学の精神とともにパネルに記載して掲示している。在学生に対しては、各種配付資料【提出資料：No.6・9】にも記載し、繰り返し建学の精神や学科の教育目的を伝えている。入学式や卒業式の折には、理事長の告辞や学長の式辞でも語られている。保護者向けには、保護者説明会・保護者懇談会（年に2回開催）において説明している。また、保護者や同窓生向けに年2回発行している機関誌「金城大学短大だより」も、本学の教育目的を具体的に伝える重要な広報手段の一つになっている。そのほか、入学希望者向けの入試募集要項【提出資料：No.15】や、就職先企業向けのパンフレット【備付資料：No.2】にも記載し、広くステークホルダーへの周知を図っている。社会一般に向けては、本学ホームページや大学案内パンフレット【提出資料：No.2・3】にも掲載し、公表している。

各学科では、毎年、専任教員と非常勤講師が一堂に会する懇談会を設けている。そこではまず建学の精神や教育目的が確認されており、定期的な点検の場となっている。また、各学科は毎年カリキュラムの見直しを行っており、同時に教育目的の点検も行っている。

- (b) 自己点検・評価を基に課題を記述する。

在学生向けの配付物が整理されておらず、重複記載している事項や、文言が不統一な事項がある。これらを一体化、簡素化し、再編集する必要がある。

基準 I -B-2 学習成果を定めている。

- (a) 自己点検・評価を基に現状を記述する。

建学の精神及び各学科の教育目的に基づく学習成果を学生に対して明確に示すものとして、平成 24（2012）年度後期より履修科目選択・決定のガイダンス時に、「各学科の教育体系」を全学生に配付している。【提出資料：No.9】これは、建学の精神⇒教育理念⇒教育目的及び使命⇒学位授与の方針⇒教育課程編成・実施の方針⇒入学者受入れの方針などの関係を分かり易く図示したものである。いわば教育課程や成績基準、学習成果の根拠を、従来の教員の視点から「学生自身が何を学ぶのか」という学生の視点に変えたものである。なお、平成 25（2013）年度入学生に配付する「Campus Guide」にはこれらの内容が含まれている。【提出資料：No.6】

また、従来科目ごとの学習成果をはかる取組としては、担当教員の裁量に任されていた成績評価しかなかったが、量的・質的データとして測定する試みとして、平成 23（2011）年度後期より学科別に「学習評価シート」（幼児教育学科では「保育力向上確認シート」、美術学科では「学習自己評価シート」、ビジネス実務学科では「学習評価確認シート」。以下、「学習評価シート」という。）を作成した。これは建学の精神や学科別の教育目的に応じたカリキュラム全体の学習目標と個々の科目の学びの指標を明確にして、学生自身が主体的に授業に取り組むことができるようにした取組でもある。全学的な評価指標として、

- ①人間性
- ②社会性
- ③専門性

を掲げ、各学科の教育課程編成・実施の方針に基づく具体的達成目標を定めて、科目別の重点項目を担当教員が記入する。これを通して、非常勤講師を含む教員全員が自分の担当する科目で、学生たちに何を学びとって欲しいのかも明確になった。学生は「学習評価シート」をもとにクラス担任と面談を行い、自分の将来像に基づいた科目選択や達成目標を学期初めに確認する。同時に前学期の成績表と照合しながら達成度を 4～6 段階で自己評価し、教員と学生双方が学習成果を確認している。この取組はまだ試行段階であるが、数年後には結果を定量化、定性化（全体平均値と個人値）して、完全な PDCA サイクル化することを計画している。

学習成果を学内外に表明する取組として、次のような事業を毎年展開している。

幼児教育学科では、1 月に「Kinjo Waku Waku World」【備付資料：No.3】という名称で、日頃の授業の成果とコーラス部、操演部（着ぐるみを中心とした

演劇)等の部活動の成果を発表する公演会を開催している。ここでは学科の学生全員が必ずなんらかの役割を果たすもので、演習系科目の日頃の学習成果が披露される。教育実習先の附属幼稚園児なども客演している。また、平成20(2008)年度、文部科学省「質の高い大学教育推進プログラム(以下、「教育GP」という。))」に選定された「特化教育」の成果を社会に示す場として、毎年度末に「学成果発表会」【備付資料:No.4】を開催している。県内の多くの保育所、幼稚園などから現役の幼児教育者を招へいし、評価や意見等の提言を得ている。

美術学科では、毎年度末に金沢21世紀美術館等で「卒業制作展」を開催し、広く社会に学習成果を公開している。【備付資料:No.5】ファッション・工芸コースでは、別途、「Kinjo Art Show Case」と銘打ったファッションショーを開催している。【備付資料:No.5】これは学生たち自身がモデルを演じ、映像は、デザイン・映像コースが担当し、ダンス部などの応援も得た総合的なパフォーマンスとなっている。白山美術館においても、冬期期間を除いて学生たちの作品を中心に展覧会を開催している。【備付資料:No.77】さらに、石川県デザイン展など各種コンクールへの応募も、学習成果を社会に問う場となっている。

ビジネス実務学科では、平成22(2010)年度に文部科学省から選定を受けた「大学生の就業力育成支援事業(以下、「就業力GP」という。))」で、地域・産業界の支援も得て「金城ビジネス学会」を立ち上げた。毎年度末にはその成果を発表する「金城ビジネス学会年次大会」【備付資料:No.6】を開催し、参加した企業人からも感想や講評を得ている。また、学内で多くの資格取得や検定試験が行われているが、その結果は学内に掲示され学生全体に刺激を与えている。

学習成果は、科目レベルでは学期末の成績評価、教育課程レベルでは「学習評価シート」を通じて確認・点検されている。また、機関レベルでは、上記の成果発表会により学内外へ表明することで、定期的に社会の点検・評価を得ている。

(b) 自己点検・評価を基に課題を記述する。

学習成果の分析・評価の仕組みが不十分であり、科目概要(シラバス)や「学習評価シート」の内容・運用を一層充実させる必要がある。

基準 I -B-3 教育の質を保証している。

(a) 自己点検・評価を基に現状を記述する。

本学では学校教育法、短期大学設置基準等の関係法令の変更等を適宜確認し、法令順守に努めている。特に幼児教育学科は資格取得が本来の目的の学科であり、文部科学省、厚生労働省所管の法令等の見落としがないよう注意している。具体的には文部科学省の説明会、日本私立短期大学協会の各種研修会、全国保育士養成協議会総会等に教職員複数が参加し、研修と共に情報収集や学内報告を行っている。

学習成果の査定として、次の手法を有している。

まず、学期初めのガイダンス時に科目概要（シラバス）とともに「各学科の教育体系」を全学生に配付し、建学の精神につながる教育目的や学位授与の方針、教育課程編成・実施の方針などを認識させた上で、学生自身「何を学ぶのか」を明確にさせる。その上で、「学習評価シート」により、学生本人がまず自分の学習成果を自己評価する。さらに教員が採点した成績表と突き合わせ、クラス担任との対話を重ねることによって学習成果の客観性を得る。これを入学時から卒業するまで、一連のものとして PDCA サイクル化している。

ただし、この手法は平成 23（2011）年度後期から導入したものであり、まだ軌道に乗っているとは言えない。平成 26（2014）年度までには、このシステムを実効性のあるものとして確立したい。

科目レベルの査定としては、毎学期末に全科目を対象とした学生による「授業に関するアンケート」（無記名）を実施している。平成 22（2010）年度に質問項目の大幅な改定を行い、17 項目に厳選した。教員は担当科目毎に評価を受け、前年度同一科目の評価値や、学科全体の平均値と比較することができる。また、平成 24（2012）年度から各科目の評価結果に担当の専任教員のコメントを加えて金城大学電子情報サービス（学内電子掲示板。以下「EIS」という。）上に公開した。また、複数の学生から問題を指摘され、平均値よりも著しく評価の低い教員に対しては、学長より口頭で注意、奮起を呼び掛けている。注意を受けた翌年に大きく評価が上がった教員もおり、このアセスメント手法は有効に機能している。【備付資料：No.36・38・39】

(b) 自己点検・評価を基に課題を記述する。

今後、学習成果を査定する手法を精査・確立し、PDCA サイクル化を一層進める必要がある。